

## 風土（気象）文芸への志向

——万葉集萩歌の文芸性に関連して——

新 垣 幸 得

凡そ文学は風土と無関係でない。「日本の文学は根源的には日本の風土において胎生される。」という立言からすれば、すべての日本文学は風土的でないものはないと言えるかと思われるので、そうだとすれば、今更風土文芸を云々する必要もなくなるのではないかという反問に出会うかも知れない。しかし、それならばわれわれは、日本文学における（気象現象をも含めて）風土というものを、文学の上で真に理解しているかということ、私自身をも含めて反問せざるを得ない。われわれはこの問題を、とかく当り前のこととして慣れ過ぎ、注意深く見つめないのではないか。もしそうだとすれば、文芸の根源を追究するという学問的な態度と方法において、欠けることがありはしないか、そういうことを考えて見たときに、拙稿では、先ず序説として最近の気象学、気候学の精密な研究成果に学ぶことの多きを感じざるを得ないのである。

もつとも和辻博士は、風土の現象を、「自己了解の仕方<sup>(1)</sup>」として解釈され、文芸や美術、宗教、風習等人間生活のあらゆる表現のうちに見出すことが出来ると述べられている<sup>(2)</sup>。

即ち、印度のモンスーンによる暑熱と湿潤との結びつきは人間に對抗を断念させ、「受容的、忍従的人間構造」の表現として、思弁への強い性向が哲学的なる仏教として、又無抵抗主義的争闘としてあらわれ<sup>(3)</sup>。アラビアの乾燥

せる砂漠の構造は、自然に對する「對抗的、戰鬪的」特性が人工的に華麗なアラビア風の裝飾模様<sup>(4)</sup>として。古代埃及のピラミッドは空漠とした砂の海に對する砂漠の人間の「力の象徴<sup>(5)</sup>」として。ギリシャの明朗な規則正しい自然を結晶せしめたものはギリシャ彫刻の合理的な「生ける肌<sup>(6)</sup>」として。ヨーロッパにおける夏の乾燥、冬の湿潤は、即ち暑熱が湿氣と結びつかないところに、自然が合理的に明るい従順な牧場の風土を形成する<sup>(7)</sup>。ルネサンスのイタリヤの絵に背景として描かれるシムメトリの樹にイタリヤの自然と合理性<sup>(8)</sup>があるとされ。西欧の陰うつ朦朧な曇日の風土は、レムブランドの絵画の中に結晶<sup>(9)</sup>せしめたものとされる。

これに對して日本の季節風の風土は、「颱風」と「大雪」に象徴されるモンsoon域中、最も特殊な風土を作り、それは熱帶的、寒帶的の二重性格を呼ぶものとし、例えば植物にはこれを最も顯著にあらわしたものととして、熱帶的な稲、寒帶的な麦に代表<sup>(10)</sup>されるとし、人間においては、モンsoon的風土の受容性と、忍従性の二重の性格として、四季の変化が著しいように、日本人の受容性は「調子の早い移り変りを要求」し、忍従性においては、「あきらめでありつつも反抗に於いて変化を通じて気短かに辛抱する<sup>(11)</sup>」と表現される。「風土」第三章を中心に全篇に亘って日本の人間の特殊な風土の性格についての卓論は、明細、委曲、その極微を衝く。まことに、哲学的な深い思索と、豊かな感受力と、体験の結合の結果であらう。その一部を引用しよう。

日本の人間の特殊な存在の仕方は、豊かに流露する感情が変化に於て、ひそかに持久しつつその持久的变化の各瞬間に突発性を含むこと及びこの活潑なる感情が反抗に於てあきらめに沈み、突発的な昂揚の裏に俄然たるあきらめの静かさを蔵することに於て規定せられる。それはしめやかな激情、戰鬪的な恬淡である。これが日本の国民的性格に他ならない。

— 第三章 モンsoon的風土の特殊形態(1)颱風的性格(三〇頁)

例えば、激情を内に蔵したしめやかな情愛とか、戰鬪的であると共に恬淡なあきらめを持つ恋愛等は、明らかに日本本なる恋愛の一つの類型として、古事記や書紀の恋愛譚に或は万葉等、あらゆる時代の豊富な材料によって答えられることを指摘されている。又庭園芸術においても合理性や秩序正しさというよりは、「気合において統一<sup>(12)</sup>」される布置、移り変りつつ調和を保つ、まとまりというものが様式的模範となり、絵画においてもこの気合というものが、「釣合」としての構図の展開にあらわれ、いわば「非合理的なる契機に充たされている生の統一的展開<sup>(13)</sup>」以外

ではないといわれる。それはやがて、文芸における「連句」においても、つながるものがあり、「一座の人々の気合が合ふことなしには連句の優れたまとまりは得られない(14)」といわれており、この種の特徴は、能楽、茶の湯、歌舞伎等にも見出し得る特徴であることを指摘されている。

凡そ和辻博士の「風土」は風土の学についての空前の名論として、最も先見的であり、その意味で不朽の名著といふべきではあるまいか。

又、風土文芸学を提唱される高木博士は、かつて、文学における環境を風土と文化の二つの範疇に分け、「この二つの光線をクロスさせたところに客観的な日本文学の正しい姿を照し出すことが可能(15)」とされ、更に文化的環境に比して風土的環境の考察が手薄であることを指摘せられたことは著名であり、又文芸の構造契機としての風土性を、直接の対象として、文芸論的立場から、「人間がそれ自身の内に於て対立する」パトスとロゴス、思想と行為等々を綜合統一するものは技術であり、芸術としての文芸は更に進んで人間に、その外なる対立者を綜合統一せしめようとする一種の創造力、この「高次の技術的性格(16)」を文芸の技術的性格として、風土の関連の中に於いて、論究せられた。こうして博士の風土文芸学は、文学の創造過程を「自然に扶けられて文芸を求める文芸学的構造を確認するためには、文学に扶けられて自然を求める観光的関係と混同してはならない(17)」と強調されている。共に博士の卓越した、創造的文芸理論は、その魅力と高邁さにおいて、研究学徒の、敬仰惜くあたわざるものである。

又、久松博士の「文学地理学的構想」は「単に山岳と海洋、若しくは水辺といふ相違のみならず」更に美の二様式、もしくは、精神の二様式まで、踏みこんで探究すべきこと、更に「風景が位置や地形のみならず、そこに生育する植物や動物と深い関係を有する」こと、「殊に植物との関連の深い(18)」ことをもつてこれ等の研究の重要な点を指摘せられていることは、風土的に改めて重要な提言をされたものと思う。そして日本の季節的、四季の変遷は、それぞれ四つの美の類型を表わすことが、西欧の二季節、南方の一季節とは甚だ異った風土であることを述べられた事も、風土文芸の立場から、われわれの重要な関心事でなくてはならない。又日本文学の「風土的区劃」においては、土地の高低起伏、山と水と異なった二つの風土の様式から、山の文学の雄大、若くは、宗教性による崇高なものとしての意識から特に上代文学における山の神性を認め、山間文学、原野文学に対して、水の文学として、河畔文学、湖

畔文学、海辺文学<sup>19</sup>をあげられ、これ等を更に時代と地域別に分類考察される。かくして国文学の分野に「文学風土学<sup>20</sup>」もしくは、文学地理学等の成立の可能性を解説される等、精密にして、みづみづしい構想による研究態度を提示される。その高邁該博なる基本的理論は、われわれの敬仰惜くあたわざる所である。

又犬養博士の綿密なる基礎的構想と風土への愛着は、その香り高き解明と相俟って吾々の心を惹きつけて放さない<sup>21</sup>。われわれは、博士の「万葉の旅」によって大きな恩恵を享けつつあるのである。稿者は、この先学の諸書を座右に置く事を忘れずに、風土を構成する地域の、氣象学的方面から万葉文学における大和を中心とする「萩」を、主として野における風土の文学として探って見たいのである。

## 二

一体日本の国土は典型的に複雑な変化を伴う大気現象の支配をうけて特色ある風土を形成していることをわれわれは知らなければならぬであろう。

即ち氣象関係書の説くところによれば、先ず大気現象が、周期的、永続的に綜合、平均されたものが氣候であり、或る地域の短期的傾向を天候とし、日日の氣象現象を天氣と称して基本的に区別される。そして氣候の要素として上げられるものに、気温、湿度、風向、風速、雲量、降水量、日照時間等があり、氣候を支配する因子としては、緯度、海陸分布、海流、地形、海抜、高度、植生等がある。各地の氣候は此等の氣候要素の組合せによって生じ、これに氣候因子が結びついて氣候型<sup>22</sup>が生ずる。

日本の氣候は、広い意味での季節風氣候の特徴を持ち、冬季は乾燥の、表日本式氣候と、陰湿な、裏日本式氣候とに分けられる。又日本附近は、太平洋の熱帯氣団と、アジア大陸の寒帯氣団との間の大きな、氣候学的前線帯をなし、寒暖の空氣の交換が行なわれる緯度帯にあつて、氣象現象に著しい変化がある。更に日本の位置する中緯度（三十度〜四十度前後）は大気循環のもっとも活発な地帯で、氣候変化に富み、その上に各地の地形が複雑であることと相俟って、北と南、日本海側と太平洋側、山地と平地、海岸と内陸などの地理的相違から氣候の対比現象を起し、これが風土の相違<sup>23</sup>となつて表われ、そこに住む人々に生活の様式や、生産の様式、更に氣質の相違を形成するとさえ

いわれている。

日本列島は、冬は大陸から寒冷な北西季節風、夏は太平洋から高温の南東季節風が吹きつけ、それに黒潮が熱や水蒸気を補給するので、冬は寒く、夏は蒸し暑い。これは、日本の地形が大きく影響しているのであって、即ち、北海道、本州を縦走する中央山脈が、気候的性格を二分している。冬期の季節風は、

日本海を吹走する際、水蒸気を海面より補給されて湿潤となった冬の北西季節風は、中央山脈をこえる際、その風上側の地方に多量の雪と雨をもたらす、風下側には乾燥した空気となって吹きおろす。夏の季節風も冬ほど顕著ではないが、同様の現象をおこす。(日本の気候。二七頁)

と述べられているが、これが即ち、西高東低型の冬の気圧配置で、この現象はかなり持続性をもち、日本海地方には曇天が続く、多雨豪雪、太平洋側にはカラッ風(凧)と晴の日が続く。即ち

降る雪を腰になづみて参り来し駿もあるか年の初に 万・十九・四二三〇 大伴家持

ささの葉はみ山もさやに打そよぎ氷れる霜を吹く嵐哉 新古今・六一五 藤原良経

のごときがそれをあらわしている。しかしこの気圧配置も周期的なりズムをもっていて、北東アリユシヤン方面に北西風が吹き去ると穏やかな天気を迎えるが、再び西高東低型の気圧配置になる。こうして寒波といわれる三寒四温的傾向を作る。

又、夏は、梅雨前線が北上すると、日本の南方に、亜熱帯高気圧が張り出し、日本は、南高北低型の気圧配置となり、この気圧から日本に、南東、南西の、所謂モンスーン型の季節風が吹き込んで来る。この季節風は、前述の通り黒潮を伴っているので、高温多湿、しかも安定した気圧配置になって、日本はその圏内に入るため夏の晴れた蒸し暑い天気が続く。次の歌はかかる炎熱を思わせる。

六月の地さへ割けて照る日にもわが袖乾めや君に逢はずて 万・十・一九九五 作者不明

又日本の位置する中緯度は、移動性高、低気圧が四季を通じて頻繁に通過するために、天気が周期的に変化し、各地域に季節的な著しい特徴を起し、四季の変化に富む気候を形成している。

即ち、冬の西高東低型の気圧配置がくずれ（二月末頃春が近づくと）低気圧が日本の南西方大陸または洋上、日本の西または北西の大陸から東進、または南東進して、日本の東方洋上で発達し、この温帯低気圧が北進し、日本海を通過する場合には、日本は低気圧の暖域に入つて、強い南風が吹く。この風が山脈を越えて日本海側若しくは反対側の山腹に吹きおろすと、フエーン現象<sup>(25)</sup>が起り気温が昇る。春先に多い現象を次の歌に見る。

谷川のうち出づる浪も声たてつ鶯さそへ春の山風 新古今・十七 藤原家隆

この強風の走り<sup>(25)</sup>を春一番といっている。しかしこの低気圧が本州の南側を東進した場合は、逆に北西の寒気団を誘い込んで太平洋側に、所によつて大雪や雨を降らせる結果となり天候は冬型に逆転する。この低気圧を気象関係者は台湾坊主と呼んでいる。

山の際に鶯鳴きてうちなびく春と思へど雪降り敷きぬ 万・十・一八三七 作者不明

この気圧配置では天候の激変が多く、近海では、漁船や小型船舶の遭難がしばしばで、突風が起つたり、春雷を起したり、また花咲雪を散らしたりする。

明日ありと思ふ心のあだ桜夜半に風の吹かぬものかは 念仏草紙 親鸞上人

思ひがけぬ嵐のあることを警告して気象的関心が窺える。こういう時には、地上の温度は三、四度でも、山岳は荒れて暴風雨や雪となるので遭難を起し易く、「芽えかえり芽えかえりつつ春なかば」（西山泊雲）の句の示すように寒気と暖気がぶつかり合いながら春は進行して行くのである。

太陽エネルギーの入射条件は三月頃になると、気候区分による気候帯の境界線<sup>(26)</sup>である三八度線附近における可照時間は二月で二九九・九度であるのに、三月では、三六八・七で六八・八時間の入射条件の大きな差がある。そして春深まる頃の移動性高気圧は、大陸から南東に走るとその東側の大陸からは北西風が吹くので、日本は、気温がさがる。この高気圧が日本を覆うと、風は弱まり晴天が続く、夜間の放射冷却のため地表の温度が零度以下にさがり、霜が降り植物の発芽にあたって被害をうける。

この時の気圧配置では、日本上空の高気圧の南東側には日本を通過した低気圧から寒冷前線がのび西側には、これ

に続く若い低気圧との間に温暖前線が連なっている。やがて六月中旬近くになると前線が日本附近に停滞して梅雨になる。これはオホツク海高気圧が、日本海や千島南島海上に張り出し、一方日本の南東洋上に北太平洋高気圧があつて、これら二つの高気圧の間を日本の南岸沿いに梅雨前線が東西に走る。これが梅雨型の主な特徴である。梅雨前線上を楊子江沿岸附近で発生した低気圧が次々に東進し、その通過によって周期的に雨を降らせる。これは六月上旬から七月中旬頃まで約一ヶ月続く。

を山田に引く注連しみなの打はへて朽ちやしぬらん五月雨のころ 新古今・二二六・藤原良経

もの皆湿つて朽ちる様が窺える。やがてオホツク海高気圧が衰え、反対に北太平洋高気圧（小笠原高気圧）の勢力が増して、梅雨前線が北方に去り、梅雨があげると、北太平洋高気圧から南東季節風が吹き出して急に夏を迎える。この梅雨前線は秋になると再び南下して、九月中旬頃から十月中旬頃まで約一ヶ月、日本の南岸に停滞し、梅雨のような雨期を齎らす。これが秋霖といわれるしとしと降る秋雨である。

明日香川行き廻みる岳の秋萩は今日降る雨に散りか過ぎなむ 万・八・一五五七 丹比真人国人

萩への愛惜が秋雨をつれなく思わせる。

秋霖と前後してやってくる台風は、日本の気候に大きな影響を与える。台風の襲来は、八、九月(27)がもつとも多く、そのうち日本に直接上陸するものは、全体の一五%位であるが、被害の最も大きいのは九月中下旬(28)である。台風は、気象災害が大きければかりでなく気候学的には、風速に関する地理分布、季節変化にも大きく影響を与える。台風の発生域は、北緯十度から二五度(29)で、南太平洋のヤップ・グアム・マリアナ・マーシャル群島の東部及東南方だといわれ襲来時の代表的な気圧配置は、先ず大陸と三陸沖とに高気圧があり、その間を北上する場合が多く、始めは東方の太平洋上の高気圧のへりを時速二十km位で西乃至北西に進み、沖繩の南東方で次第に進路を北に転じ速度を増して北東乃至東北東に転向して進むことが多く、日本に上陸すれば大きな災害を起す。特に秋の場合には、日本附近に前線が存在するのでこれと合体して、温帯低気圧の前線が出来るので特に大雨を降らせることが多い。台風の通過した地方は暴風雨となり、風水害を起すのが常であるが、台風一過後は晴れた秋空を迎える。枕草子における所

謂、「野分のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ」(二〇〇段)がそれである。

### 三

さて以上の如く日本の氣候の骨格の大体を稿者なりにまとめるところがあつた(30)が、勿論複雑極まる大氣現象は単純ではない。ただしかし、このような氣象の原則によつて日本の氣候は形成されることが、ほぼ理解されるが氣象学的には、日本の氣候を四季の外に約一ヶ月づつ続く梅雨と秋霖を加えて、冬、春、梅雨、夏、秋霖、秋の六季節に考えることを妥当(31)としている。文学における季節感もこれを重要視すべきではなからうか。氣候は又この外に、変動、周期説を考慮しなければならぬ(32)。さてこのような氣象現象に伴つて、われわれの風土は形成され、そこに生活するわれわれを風土の胎生による風土的人間として誕生形成されたものと見るべきであらう。われわれの精神や肉体は風土の参与によつて完成されると見るべきであつて、文学もその限りにおいては、風土のかかわり合いがもつとも強烈に作用するものと考えられている。

勿論、氣象現象によつて形成される季節的変化に伴う現象は、例えば、春は、霞、陽炎、芽吹き、春雨、春の海、そよ風、花、おぼろ月、嵐、若葉、新緑、鳥の声、晩春、五月晴(氣象学では春)。梅雨のときは、五月雨、長雨、湿っぽさ、うつつうしさ、曇天。夏は、朝露、夕涼み、月、炎熱、海、蒸し暑さ、酷暑、不快指数、夕立、雷鳴、虹、朝焼け、夏草、台風。秋は、秋雨、台風、野分、秋風、虫の声、夕焼け、秋晴、秋の野、八千草、秋月、夕露、渡雁、秋萩、時雨。冬は、古枯、霜、霧、小春日和、寒月、霰、凍雨、霧氷、雪、つらら、等々人々は文学の素材として、創作の契機として、対象として、この大氣現象の移り変りによる季節の風物、景物が、われわれの文学に参与することによつて創造的な作品が、造型されるのがあまりにも明白な事実ではないか。万葉集は特に卷八・卷十にこれらの多くが鮮やかに詠まれているのである。とにかく風土の現象は、芸術創造の母胎となっていることは明らかである。氣象現象が、或は風土が、いかに、文学作品の、基盤や対象、媒材となっているかを吾々は多くの作品によつて感得するのである。



#### 四

植物の生態は、気象現象の変化に即応してその多くが鮮かな変化を示すが、温帯湿潤気候区に属するわが国は、動植物の繁殖場を提供した観があるといわれ<sup>(33)</sup>、更に季節的変化の顕著なため、蕾、開花、落花、結実、芽吹き、若葉、新緑、濃緑、紅葉、落葉と殊に落葉樹に変化が著しく美観を呈することを、われわれは経験する。

太陽放射の年変化の経過に伴い気象現象は、地理的条件によって、或る地帯の気候を形成し、更に或る地方に激しい季節変化を生ずることは、前項にも触れたが、そしてその地域に特色のある風土を形成するものであることを、多くの気象観測データは示しているが、そういう中で植物生態であり、人間の生活である点を考えなければならぬ。

萩が、万葉集で季節的景物として植物、動物中でも多くの鑑賞の対象となっていることについては、美夫君志第十二号に些か卑見を述べたが、本稿では、先ず歴史的に、上代歌謡と勅撰集(八代集)との比較において享受の在り方を見る。

一体萩は、記紀並びに上代歌謡にも現われず、「郡内に生ふる銀銅採色草木禽獣魚虫等の物、具に色目を録さしめ<sup>(34)</sup>」といわれた風土記にも記されていないのに、平城宮を中心とする奈良朝時代、万葉第三、四期に盛んに鑑賞されたという点、しかしそれ以後の勅撰集には必ずしも、万葉のように、熱愛されていない点を次表の統計に見ることしよう。(次頁表)

即ち萩は、万葉集では、全歌集の五・四%の詠み率を示し、特に、巻八、巻十の四季部立に集中し、中でも秋雑歌の部に多く、巻八、巻十合せて八三首という大きな量を示している。

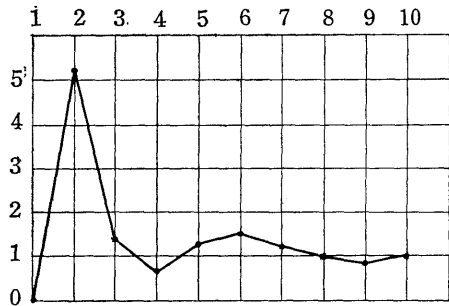
そして季節感の自覚を肌感じとるという極めて鮮明強烈な享受の仕方、奈良の都人達の風流生活の状況を反映していると見られるのである。これ等の歌には、貴族的といわれる中にも、自然への愛情は深く、真淵が「ををしくも、なほく、設けて詠まず、ふつつかなる如くしてよく見ればみやびたり<sup>(35)</sup>」と指摘したように、何か、一途な、民衆的な幅の広さと底深い力の漲りを表現している。

上代歌謡・万葉集・八代集における萩の詠まれた歌に関する数と比率

歌 数 卷	書名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	古代歌謡 集上代歌 謡集より (注)	万葉集	古今 和歌集	後撰 和歌集	拾遺 和歌集	後拾遺 和歌集	金葉 和歌集	詞花 和歌集	千載 和歌集	新古今 和歌集	
		332 (0)	4516 (5.4%)	1111 (1.4%)	1426 (0.8%)	1351 (1.3%)	1220 (1.7%)	716 (0.3%)	411 (1%)	1285 (0.9%)	1979 (1%)
1							2				
2			3								
3			1			3		2	3	2	
4				11			15			5	10
5					2					2	1
6			2		10		1				
7			3			2					
8			36	2							2
9			3			3					
10			75				1		1		
11											2
12											
13			1			4					
14				1			1				1
15			4	1							3
16							1				1
17			1			4					
18										2	1
19			6			1					
20			7								
計		0	142	15	12	17	21	2	4	11	21

(注)

古事記歌謡	113
日本書紀歌謡	128
続日本紀歌謡	9
風土記歌謡	21
仏足石歌	21
琴歌譜歌謡	21
古語拾遺歌謡	3
皇太神宮儀式帳	2
上宮聖徳法王帝説	4
日本国現報善悪靈異記	10



各集において主として秋の詠まれた秋の部の巻

書名	巻及び歌数	萩歌数	萩歌数計	%
万葉集	卷八 秋雑歌 96 秋相聞歌 30 卷十 秋雑歌 286 秋相聞歌 78	26 8 57 18	109	22.2
古今集	卷四五 秋歌上 80 秋歌下 65	11 0	11	7.8
後撰和歌集	卷五六 秋歌上中 54 卷六七 秋歌中 80 秋歌下 92	2 10 0	12	5.2
拾遺和歌集	卷三 秋 78	3	3	3.8
後拾遺和歌集	卷四五 秋上 100 秋下 42	15 0	15	10.5
金葉和歌集	卷三 秋の歌 109	2	2	1.8
詞花和歌集	卷三 秋 58	3	3	5.1
千載和歌集	卷四五 秋の歌上 76 秋の歌下 85	5 2	7	4.3
新古今和歌集	卷四五 秋歌上 152 秋歌下 114	10 1	11	4.1

しかし古今集以下の勅撰集では、後拾遺集の二一首、(一・七%)を最高に、殆んどが一%前後で、これを各勅撰集の秋歌の部立として見た場合でも、万葉集の二二・二%に対して、すべてが僅か一〇・五%以下である。これは表が示すように、万葉の前後を通じて比較すると、圧倒的に万葉集に多く、むしろ突然変異的傾向を示している。なぜこのような結果が現われたかは逐次述べるとして、先ず各集から一首づつ摘出して萩歌觀賞の態度にそれを伺って見よう。

(1) さを鹿の妻ととのふと鳴く声の至らむ極なびけ萩原 万葉卷十・二一四二作者不明

(2) 夜をさむみ衣かりがねなくなべに萩の下葉もうつろひにけり 古今二二一 かきもとの人 まろが也と

(3) 秋萩の色づく秋を徒らにあまたかぞへて老いぞしにける 後撰 三〇一 貫之

(4) 露けてわが衣手はぬれぬとも折りてを行かむ秋萩の花 拾遺 一八二 躬恒

(5) 限りあらむ中のはかなくなりぬとも露けき萩の上をだにとへ 後拾遺二九九 和泉式部

(6) 小萩原匂ふさかりは白露のいろいろにこそみえ渡りけれ 金葉 二四二 僧正行尊

(7) 朝な朝な露重げなる萩がえに心をさへもかけて見るかな  
宮城野の萩や牡鹿の妻ならむ花さきしよりこえの色なる

詞花 一四四 周防内侍  
千載 二四八 藤原基俊

(9) 河水にしかのしがらみかけてけり浮きて流れぬ秋萩の花

新古今 二二八 前中納言匡房

古今以下の歌を見ると、感覚の新鮮さに乏しく深い感動が湧かない。一般に平明低調さが目につく。

古今から順を追うて素描すれば、表現に強靱さがなくなると、理智に傾き、平板に弱々しく、しかし心に沁みる愛情が漂い、柔軟な色調のきらめきから、写実的な心入れへ、やがて艶とあはれに、落ち着くといえようか。

こういった表現は、むしろ萩を一点景として、脇役的に取り扱っているのに対し、万葉では、真正面から直接的に、取り組み、譬喩的なものにしても、強い表現になっている。一をもって他を推すことは、稍々危険を伴うものとしても、一般にそう感じられる。これは一体、彼等の生活する歴史的風土と、社会的、文化的心情に関係しているのといえよう。

## 五

萩に関する歌は、一首の中に萩の名が詠み込まれているものと、題詞等によってその歌が萩を詠んだ歌であるものとを合すれば、一四二首を計算することが出来る<sup>(36)</sup>。これを文芸的に分類すれば凡そ次の如くである。この分類は歌の個々について再三の検討を加えた結果ではあるが、特に巻八、十等の相關の中には譬喩的表現も多く、それは、奈良時代になると、自然は人間生活を美化し、癒すものとして彼等の耽美的、享樂的気分の対象として、その醸し出す感興に浸り、それを譬喩的に表わす傾向に変わって来た。そうした新しい文芸的歌風、いわば風流の世界に陶然とした境地を味わう。こういった主客の中間を行く、不即不離の境地、これはこの時代の人々の生活気分の反映であったといわれ<sup>(37)</sup>、例えば、八卷一五九五、一六〇八、十卷二二五四、二二五五等に強く現れている。こうした、対象の醸し出す感興を現わすという中間的なものは、どちらにも取れるという、微妙な点が存するので、大局においては誤りなきを期したつもりである。右の事柄から考えても、歌の詠み方は極めて重要であり、稿者の最も適切と信ずる古典文学大系万葉集をもとに、注釈を参考にして分類した。

			2144		4318	2101
二			2145		4320	2102
15			2150	三、主題の媒材となるもの	(ロ)	2103
3681	2289	1532	2152	二、同時主題(二つのものを主題とする)	一、主題について詠んだもの	
			2153	(58)	(イ)	そのものズバリ萩について (66)
			2155	(7)	右の各項の用例を一つづつ示す	
			2168	2285		2105
			2170	1595		2106
			2171	1608		2108
			2175	1790		2109
			2225	2114		2111
			2228	2254		2112
			2231	2255		2113
			2252	2258		2116
			2259	2284		2117
			2262	*……序にして譬喩をあらわす		2118
			2262			231
			2280			233
			2286			1514
			2287			1532
			2290			1542
			3324			1557
			3656			1558
			3677			1560
			3691			1575
			3957			1579
			4154			1580
			4219			1599
			4224			1600
			4249			1605
			4252			1628
			4253			1633
			4297			2094
			4315			2095
			4444			2096
			5515			2097
			2143			2098
						2099
						2100

三	8	1468	霍公鳥声きく小野の秋風に萩咲きぬれや声の乏しき 夏雑歌(霍公鳥の歌) 小治田広瀬王
四	7	1363	春日野に咲きたる萩は片枝はいまだ含めり言な絶えそね 雑歌(花に寄す) 作者不明
五	10	2285	秋萩の花野の薄穂には出でずわが恋ひわたる隠妻はも 秋相聞(花に寄す) 作者不明

この調査の結果を、主題と主題以外とを詠んだものと大別すれば、それぞれ七一首<sup>38)</sup>、五〇% 伯仲となる。この事は萩が主題として注目され、歌の対象となっていることを示すと共に、更に他の主題を表現するための媒材として、万葉植物中最も、文芸性の粹を拈げたものとして注目に値する。

媒材として詠まれた歌は、卷八の秋相聞、卷十の相聞、露に寄す。雨に寄す。花に寄す。等に多く、主題として詠まれたものは、卷八の秋雑歌と、卷十の秋雑歌に特に多い。主題として詠まれたものは、写實的、叙景的のものが多く、例えば

真葛原なびく秋風吹くごとに阿太の大野の萩の花散る 十・二〇五九 作者不明

また媒材として詠まれたものの中には、詩的創造の美しい作品が目につく。そして風土的観照を鋭敏に感じている。例えば

玉に貫き消たず賜らむ秋萩の末わら葉に置ける白露 八・一六一八 湯原王

とにかく萩がこのように歌の素材として多く採り上げられた事については、人間の美意識の展開や歴史地理的環境も絡んでいると見られるが、この事は素材構成の上からも更に総合的に検討した上で述べたい。(四四・八・三一)

本稿は、昭和四十二年第二回万葉研究連合大会に於て発表したものを主に、風土を中心とする気候、気象学に根拠を求めて執筆したもので、主として風土気象方面の事を上篇として、本誌に掲載し、本稿の中心である後篇は他日掲載の機会を得たい。

(1) 和辻哲郎博士「風土。人間学的考察」第一章風土の基礎的理論一三頁

(2) 前掲書、同章一二頁

(3) 同書 第二章「三つの類型」(一)モンスーン四二頁～六二頁

(4) 同書 同章 「三つの類型」(二)砂漠七六～七九頁

(5) 同書 同章 「三つの類型」(三)砂漠八〇頁

(6) 同書 同章 「三つの類型」(四)牧場一一五～一五〇頁

(7) 同書 同章 「三つの類型」(五)牧場一一九～一二三頁

(8) 同書 同章 「三つの類型」(六)牧場一二二頁

(9) 同書 同章 「三つの類型」(七)牧場一八五頁

(10) 同書 第三章「モンスーンの風土の特殊形態」(一)日本(イ)颱風的性格二二五頁

(11) 同書 同章 「モンスーンの風土の特殊形態」(二)日本(イ)颱風的性格二二八頁

(12) 同書 第四章「芸術の風土的性格」三一九頁

(13) 同書 同章 「芸術の風土的性格」三二四頁

(14) 同書 同章 「芸術の風土的性格」三二五頁

(15) 高木市之助博士「日本文学の環境」九頁

(16) 高木市之助博士「古文芸の論—文芸の風土的關聯について—一八～二三頁

(17) 高木市之助博士「雜草万葉」その二 風土。万葉文学への一つのアプローチについて風土文学的操作を語る二六一～二七二頁

(18) 久松潜一博士「日本文学の風土と思潮」文学地理学の構想一八～一九頁

(19) 久松潜一博士「同書—日本文学の風土的区劃—二一頁、同博士「日本文学の思潮」山水二五七頁

(20) 久松潜一博士「同書」山の文学美と宗教性三〇頁

(21) 犬養孝博士「万葉の風土」万葉集における地名二四七頁

(22) 福井英一郎博士「氣候学」四～五頁、設楽寛氏現代地理学大系 I 第二卷氣候学一四頁

(23) 和達清夫博士監修日本の氣候「日本氣候」の特徴と原因二五頁

(24) フェーン(Föhn)(独)は、アルプス地方で「山の斜面を吹き降ろす高温で乾燥した風」のことをいうのであるが、今日ではこの種の風を呼ぶ名称となった。フェーン現象は、例えば日本の場合、風上側である南側から一五度の湿潤な気流が山の斜面を上昇する時、山の高さが二千米あるとして、百米について〇・五×〇・六Cの割合で気温が降り雲を生じて雨を降らす。頂上に達した時は、気温は五度になる。この気流が山頂を越して反対側の山腹に降る時は、乾燥断熱変化によって百米降る毎に気温が一度づつ上昇する。麓まで来た時は、約二十

度程度上昇する。このようにして暖かい乾燥したフェーン現象が起るのである。昭和二十四年の能代大火、同じく二十七年の鳥取大火はこの

現象によって起つたといわれる。稿者は山形県米沢地方の吾妻山麓でこれを経験した。現代地理学大系―第二卷「気候学」七四頁及び気象の事典

- (25) 気象庁天気相談所編「日本のお天気」二〇頁
- (26) 和達博士監修「日本の気候」三二頁、日本は三八度線附近を境として気候帯の境界線が二毛作の限界植物分布
- (27) 和達博士監修「日本の気候」一三五頁参照
- (28) 高橋浩一郎博士「日本のお天気」一〇二頁及日本の気候七〇頁
- (29) 和達氏前掲書一三二頁、台風の発生分布図参照（台風は北太平洋高気圧から吹き出す、北東貿易風と南半球の亜熱帯高気圧から吹き出す南東貿易風または、インド洋を吹走する南西季節風との間のいわゆる熱帯前線の附近だといわれる。日本の気候より）
- (30) 福井氏、和辻氏、高橋氏外気象学書参照
- (31) 和達氏、前掲書「日本の気候」三六頁、高橋浩一郎氏「日本の天気」二五頁
- (32) 気候変動や気候周期については、諸説があり、例えば、気候変動では、太陽黒点の増加による気温上昇、大気の大循環の長期変動、地上気圧の変動等によるとするもの、気候周期には、歴史や年輪の七百年周期、太陽活動の長期変動八十年周期、海況気象現象の十八年周期、太陽黒点の十一年周期（雨量が多くなる）、東北気候の七年周期、台風早ばつの五年周期、風水害被害の四年周期等々であるが、測器時代の気象観測では三十年平均値を気候の平均値としている。しかし測器時代の気候変動は、日本では一八八〇年頃からとされており、とすれば九〇年しか遡れない。それ以前は、自然現象の記録、例えば樹木の年輪、氷河の模様、湖水の水位、花の開花期、暴風雨、洪水、結氷等による外ないといわれる。高橋浩一郎氏「総観気象学」三二二頁―三三六頁による。
- (33) ゲッペンの気候分類により我が国はC<sub>2</sub>温帯湿润気候（温帯多雨気候区）に属する。「日本の気候」及「気象の事典」（東京堂）参照
- (34) 続日本紀卷六、元明天皇和銅六年五月二日の条、風土記撰進の詔勅
- (35) 加茂真淵全集、万葉大考
- (36) 拙稿、美夫君志第十二号「万葉集の萩と梅花考」七二頁参照
- (37) 窪田空穂万葉集評釈第七卷一九二頁参照
- (38) 拙稿、美夫君志の調査と趣向をかえて分類した